

辻村深月さん『家族シアター』 スペシャル・インタビュー

インタビューー 榎本正樹

——今年でデビュー十周年を迎えられた辻村さんは、五月には『盲目的な恋と友情』、八月には『ハケンアニメ!』、そして十月には『家族シアター』と、三冊の新刊を刊行されました。改めてこの十年間を振り返ってみていかがですか。

辻村 三つの出版社から三冊の小説をリリースするにあたって、三社新刊リレーフェアのチラシを作っていただきました。これまでの小説家としての履歴も掲載されています。このチラシを十年前の自分が見たらすごく驚くだろうと思いました。同時に喜ぶだろうとも。大好きなマンガ家さんに装丁を担当していただいたり、かつての自分には想像もできない「女の妄執」や「家族」といったテーマに挑む作家になったことは感慨深いです。デビュー当時は自分の知っている世界を書くことで手いっぱいでした。この十年で未知のことを書くことにも抵抗がなくなりました。

——三作品のリレー刊行以外にも、『太陽の坐る場所』（2008・12）が映画化されました。

辻村 映像化していただくと、どうしても原作以上のものを期待してしまうのですね。原作と精神を同じくしながら、さらに深く掘り進めた世界を見せていただきたい気持ちがあります。映画化された『太陽の坐る場所』にも、オリジナルのシーンがいくつかありました。私が見ていない所で、登場人物はこういうことをしていたのか、このシーンを私が書けたら良かったのに、と思わず嫉妬するシーンもありました（笑）。そのような新しい経験ができる瞬間をもらえるので、自作の映像化はたまにあるご褒美のようなものとして受けとめています。小説は普段あまり読まないけれど映画を観る習慣がある人や、キャストのファンの人が観てくれて、原作は知らなかったけれどこの物語は自分のことのように感じられたというような感想をいただくと、それらの話を必要としてくれている人のもとにより広い形で届けることができたのだと、とても幸せな気持ちになります。

——『家族シアター』には書き下ろし一作を含む、二〇〇九年から一二年にかけて発表された七つの短編が収録されています。発表メディアはすべて異なりますが、家族小説を意

図されて書き始められたのでしょうか。

辻村 複数のメディアから短編のご依頼をいただく中で、いつか一冊の本にまとまったらいいなという漠然とした思いをもちながら発表していった短編です。家族は幅広いテーマで、どの主人公についても当てはまります。たとえば「時」や「少年少女」といったテーマで依頼された短編に対して、そのオーダーに主人公を合わせながら、広い意味での家族小説に仕上げていくことを裏テーマとして課しました。

——中学生女子、大学生男子、主婦、大学の准教授、小六女子、老人男性、サラリーマンというふうに、各短編では主人公がさまざまなジェンダーと年齢に設定されています。

辻村 自分より上の世代の主人公を書く場合、たとえば母と娘であったら、これまで娘の視点で書いてきたんですね。母と娘は私の中で普遍的な関係性のテーマとしてあって、母を憎む娘の葛藤を書いてきました。そこでわかってきたのは、娘の立場の方が親に対して圧倒的に強いということ。こうしてほしかった、という娘の過剰な思いを一方的に引き受ける母親は、感情を言語化することが苦手で、何だかよくわからないけれど娘に嫌われているというような、もやもやした未消化の状態から抜けだせないままです。子供の立場を裏返して、親の側から書くことに挑戦してみたいと思いました。

——『妹』という祝福と「1992年の秋空」は、中二の主人公と中三の姉、小六の姉と小五の妹というふうに、年子の姉妹の関係を描いています。これまで辻村さんが描かれてこなかった、新しい関係のパターンですね。

辻村 単行本の帯の背に「大好きだけど、大っきらい！」と入れていただいたんですけど、家族にはそういう所があって、「大好きだけど」基本的には「大っきらい」なんですね（笑）。身内なので期待度が上がるし、遠慮がない。でも他人に悪くいわれると、庇いたくなくなってしまいます。恥ずかしい存在だけれど、ある瞬間、誇らしく感じてしまう。矛盾した感情に常に引き裂かれているんです。

——回顧＝懐古されるべきかつての時間が描かれている点でも、二つの短編は共通しています。なぜリアルタイムではなく、振りかえられるべき過去という設定が必要だったのでしょうか。

辻村 家族関係は「嫌い」で始まり、それが「大っきらい」に変わっていくけれど、ある程度距離ができた、時間が経過することで、初めて「好き」になるのではないかと。懐古のモードで書いたのは、そうした離れた、別れたりする経験があって、特に『妹』と

いう祝福」では姉は結婚して新しい家族を営むことになるわけで、そういう状況になって初めて客観的に理解されてくる好き、嫌いの感情を際立たせたかったからだと思います。

——妹の亜季が、結婚式の披露宴会場の席に置かれた姉の手書きの手紙を読むシーンで、小さな謎が提示されます。辻村さんならではの謎かけの趣向だと思います。

辻村 ミステリ作品でデビューしたにもかかわらず、犯人当てがあるようなミステリを最近書いていないんですけれど、それでもやっぱり言われたと思うのが、ミステリ作家が書いた家族小説だね、ということです。ミステリをたくさん読んで、私もいつかこういう小説を書くことができる人間になりたいと願った思いが、小説家としての私の原点にあります。この短編集に収録されている家族の話は、どれも大事件ではなく、場合によっては事件といえないぐらいの小さなできごとを扱っています。さらに、事件が起こるのが主人公本人ではなく主人公の家族の誰かに対してで、身内である主人公と一緒に読者が謎解きとして考えていく構造です。

——主人公の主婦と高校二年の娘の葛藤と和解を描いた「私のダイヤモンド」の中でも、あるキーホルダーを見た娘がショックを受ける謎めいたシーンが、ドラマチックな展開につながっていきます。

辻村 ミステリ作家から出発して一般小説を書くようになったと指摘を受ける機会があって、自分はミステリの本家の子ではなく分家の子だったのかと、愕然としました。家族会議には呼ばれるけれど、相続権はない（笑）。それに気づいた時には打ちひしがれたりもしましたが、分家だからこそできることはたくさんあって、ミステリの脳で書きながらもミステリに縛られることなく、たとえば謎がない所からいきなり謎解きを試みる、みたいなアクロバティックな躊躇のなさ、この十年間で獲得したことの一つだと思っています。

——「1992年の秋空」は、はるかとうみかという姉妹の命名をめぐる物語でもありません。この短編は、小山宙哉さんのマンガ『宇宙兄弟』のムックのために書かれた短編で、「宇宙兄弟」ならぬ「宇宙姉妹」の物語であるわけですが、縛りの中で家族の物語を構想していく、この短編集の方向性がはっきりと伝わる作品ですね。

辻村 縛りによって小説を書くのは、普段開けない引き出しを引っかき回して何かを探し出す行為に近くて、楽しい経験です。『宇宙兄弟』のムックのために短編を書いていただけませんかというお話があって、私に依頼が来たということは、つまり「宇宙姉妹」を書けということに違いないと勝手に解釈しました（笑）。日々人（ひびと）と六太（むった）は宇宙を目指しますが、宇宙に行くことを目指さない、つまりは読者にとって身近な話にし

ようと考えました。私ははるかとはほぼ同年代ですが、毛利衛さんがエンデバー号に乗って宇宙に旅立ったニュースは強く印象に残っています。日本語が通じる、自分たちの言葉で話す人が現実に宇宙に行って、日本の子供たちのために授業をしてくれる。あの日、宇宙からの中継をテレビで観た兄弟や姉妹や家族の間に、さまざまなドラマが生まれたはずで

——毛利さんが宇宙に行った、一九九二年という具体的な年をピックアップしたことに意味があるのですね。

辻村 これまでは年代を限定しない方が、幅広く読んでいただけるのではないかと考えていましたが、この作品を書くことで具体的な年を設定して書くことにも意味があることがわかりました。私の書くものは生々しさが表に出て、ノスタルジーが希薄なんです。ノスタルジーを武器にできることを初めて経験しました。

——「私のダイヤモンド」は、名古屋という地方都市が舞台であったり、主人公の家族と対立するもう一つの家族を出したりと、設定が複雑化しています。母と娘の葛藤を超えた新しい関係への着眼も見逃せません。

辻村 『ゼロ、ハチ、ゼロ、ナナ。』（2009・9）を書き終えてすぐに、この短編に取りかかりました。『ゼロ、ハチ、ゼロ、ナナ。』では、娘サイドから母親を描く最高到達点に達したとの感があり、それ以上のものが書けるとは思えませんでした。あの作品に登場した二人の母親は、娘の感情が理解できなかった。あるいは無自覚に理解しようとしなかったと思うんです。その無自覚さって何なんだろうという問いを探究するために、母親を主人公に設定した作品を書くべきだと思いました。いずれ長編で書かれるべきテーマかもしれないと、いま漠然と考えています。

読者からいただいた感想の中で面白かったのが、母親の絢子（あやこ）にイラッとしながら最後まで読まなければならないのかと思いました、というものです。『ゼロ、ハチ、ゼロ、ナナ。』とはまた異なる地方都市の、その地方の価値観だけで生きている世間知らずの母親がいて、そんな母親をばかにする娘の構図って、いろいろな場所にあると思うんですね。そのようにして、母親より自分の方が頭がよく、ものの道理をわきまえていると思いきりこんでいる頭でっかちの娘が、自分だけでは解決不可能な事態に陥り、母親の存在に助けられる物語が見えてきました。

——理解不能と考えていた母親が、実は最大の理解者であり、救い手であったということですね。絢子の発したある言葉によって娘は救われます。娘にとっては評価できない絢子の人生の履歴そのものが、あのような救いの言葉を言わせているんですね。

辻村 娘は母親を都合よく見放し、都合よく甘えます。母の言葉によって娘は救われ、二人の距離は微妙に近づきます。とりあえず今日の夜は健やかな眠りにつくかもしれないけれど、明日にはまた大げんかが始まるかもしれない、そういう感じはこの短編だけでなく、どの話にも出ていると思います。

——「タイムカプセルの八年」では、父性の力とでも表現できそうな連帯する父親たちが描かれます。

辻村 二十代、三十代と歳を積み重ねてきてしみじみ思うのは、子供時代に想像していた「大人」は、実際には存在しなかったということです。自分は自分のまま、見た目だけ大人になって、中身はあまり変わらずに成長する。お父さんになって育児への参加を求められ、その結果自分の趣味の時間が割かれてしまうとか、サンタクロースに成り代わってクリスマスプレゼントを買ってこななければならないとか（笑）、父親の役割になじめない大人もいるはずだという所から積みあげていって、割とあっさりとして大学の准教授の孝臣（たかおみ）ができて上がりました。ふまじめな父親だと思われても構わないと考えるノーガード状態のお父さんですが、息子のクラスメートの父親たちとの交流の場で、コミュニケーション能力があり、学校の行事にも積極的に参加するような知り合いの洋菓子店の店主の屈託のなさに接したりすると、気持ちがざらつくわけですね。

公立の小学校では、その地域に住んでいる同年代の子供という一点のみで、いろいろな子が関係づけられます。人生で唯一とっていい、多様な人間が集まる場所なんですね。だからこそ、そこに葛藤や軋轢が生じるわけです。よく考えてみれば、そういう子供たちの親である、お父さんお母さんの父母会での関係も必然的にそうなる。そこを出発点に、想像力を膨らませて書いた短編です。

——放置されていたタイムカプセルを見つけだし密かに埋める父親の行為が、主人公の息子にある幸せな状況をもたらします。父親は息子がかつて抱いた願いや思いを現在に引き寄せる役割を果たします。

辻村 家族のあるアクションが、他の家族の運命や人生を決定づけるようなことって、たくさんあるはずですよ。その時にはわからないけれど、時間が経って初めてわかる。かつて抱いた感情がタイムカプセルに託されて現在にもたらされるわけです。かつてと今を取り結ぶタイムカプセルは象徴的なアイテムだと思います。

——そのモチーフが、『ドラえもん』が縁で知りあった男女が、結婚し、子供が生まれ、パパとママになるまでを描いた「タマシイム・マシンの永遠」につながっていくわけですね。

辻村 自分の人生を振りかえってみると、あの時あれをやっていたら、あるいはこれを選択していなかったら、こういうことにはなっていなかった、というようなことがいくつもあるんですね。私自身が他人の人生に介入する体験も最近しました。私の読者同士が私の本をきっかけにオフ会で知り合い、カップルになって結婚したことを報告してくれたんです。すごく不思議な気持ちです。お二人は感謝してくださっているのですが、それこそドラえもんぐらい普遍的な存在であるならいざしらず、私でいいのだろうか、と恐縮してしまうような気持ち（笑）。もしかしたら歴史というのは、こうした小さな奇跡のような出会いの積み重ねなんじゃないか、と思います。

出会いの積み重ねがある一方で、ニアミスをしたり、出会えない状況もあるのではないのでしょうか。たとえば私が会うことができなかつたひいおじいちゃんとか。でも、彼らからずっと続いてきているものが確実にあるんだなと思うと、襟を正す気持ちになります。三歳ぐらいまでの、無条件に周囲の人に可愛がられた時間を私たちは忘れてしまっています。でも親しい人に愛された記憶のかけらのようなものは、どこかに存在しているはず。その部分を、ドラえもんの道具の力を借りることで実現するとどうなるか考えて、このような話になりました。

——タマシム・マシン（魂を運ぶマシン）というのは本当に言い得て妙ですね。親として子育てをすることはかつての自分自身の子供時代をもう一度経験し直すことに他なりません。自分の子供への祖父母や両親の接し方を見て、家族に大切にされていたかつての日々をそこに見る。かつて存在したかけがえのない情景を、自分の子供を通して追体験する。私たちはタマシム・マシンによって幼少時の記憶を次の世代へと先送りし続けてきたんですね。

辻村 先送りし続けてきた、という表現はとてもよくわかります。読者自身に自分の家族に引きつけて読んでもらえるのが、この短編の良さなのかもしれません。

——ファンとかマニアのレベルを超えて、おそらくは辻村さんの精神形成に多大な影響を与えてきたと思われる『ドラえもん』という巨大な作品に対する、リスペクトやレスポンスとして書かれた部分はありますか。

辻村 『ドラえもん』はある種の教訓譚として読まれたり、泣ける作品というような文脈で語られることが多いのですが、『ドラえもん』に関して私は過度な読みがあまり好きではありません。『ドラえもん』はいい意味でまっとうなマンガなんですね。いま精神形成に多大な影響があったと指摘されて、本当にその通りなんですけれど、私にとって『ドラえもん』は世界を測量する「ものさし」のようなものなんです。私を動かすウィンドウズみた

いなもの。つまりOSですね。あらゆる思考の根拠になっているOSが『ドラえもん』なんです。物語の基準を私に教えてくれる教科書のようなものと言えば、ちょうどいいかもしれない。私はずっと普通であることがコンプレックスだと言い続けてきました。だけど、その普通さと『ドラえもん』のOSってすごく相性がいいというか、似ている気がして、最近では受け入れられるようになってきたんです。普通だからこそ、普通であることの気持ちができるし、ぶれがないというか。

——収録短編中、唯一の書き下ろし作品「孫と誕生会」は、一人暮らしをする七十近い祖父の元に、アメリカ暮らしの経験をもつ小三の孫の実音（みおん）が両親とともに帰ってきて生活を共にする物語です。

辻村 この話も祖父より孫の方の気持ちがよくわかるんですね。友達とうまくなじめない孫に対して、こちらからどんどんいかなきゃだめだと指南するおじいちゃんの精神的なマッチョさは、あまりに正しすぎて誰も何も言い返せない。教室の息苦しい人間関係の中を何とかバランスをとって生きている孫から見れば、おじいちゃんの言動はまぶしすぎて直視できないと思うんです。おじいちゃんは、なぜ孫がうまくいかないのか理解できない。その二人がお誕生会でのあるできごとを通じて、お互いを少しずつ理解していく。「私のダイヤモンド」でもシリアスなできごとが起きて、お互いに理解できないと思っていた母と娘が結びつく、その一瞬がどうしても書きたかった。そのような日常の中にたちあられる一瞬を、どの短編でも書いていたんだなと、いま改めて思います。

——父親や母親の愛とはまた違う、おじいちゃん愛の描写がすばらしかったです。孫娘に排他的なクラスメートの女子に対して、「おじいちゃんは、あの子たちが嫌いだ」とはっきり宣言します。「嫌い」という言葉を口に出せなかった実音の心情を代弁することで孫は救われます。

辻村 子供を最後に守るのは身内だと思うんです。自分の子供や孫がいじめられ、傷つけられた時に、相手の家に怒鳴りこんではいけないのか。そういうシンプルな感情を実直に書いてみたかったんです。それでああいう言葉になりました。

——私たちは家族のしがらみから自由にはなれません。衝突と和解を繰り返していくのが家族なのだと思います。それが家族だし、あえて言えばそれが「希望」なのかもしれませんね。

辻村 「タマシウム・マシンの永遠」にも書きましたが、家族の中で一番小さい人に合わせて一挙に家族全員の呼び名が変わるんです。おばあちゃんはおじいちゃんから見れば妻

であるはずなのに、「ばあさん」と呼ばれる。私が出産した後、それまで家族の中で私はお姉ちゃんと呼ばれる立場だったのですけれど、急にみんなからお母さんと呼ばれるようになり驚きました。

タイトルの候補を担当編集者にいくつか出した中で、『家族シアター』が一番いいと思いますと言っていただきました。家族とは自分の役割を演じる場所です。たとえば子供に瓶のふたをとってと言われると、子供に期待されているので、がんばらなきゃと思います。自分の親も普通の人間で、どうにか格好をつけたりがんばったりしながら、ぼろが出ないように親の演技をしてきたのかもしれない。子供時代を思いだしてみると、私も親を落胆させないように子供っぽいふりをしたりしていました。家族という劇場を成立させるために、家族みんなががんばっていたんです。家族小説として、とてもいいタイトルになったと思います。

——劇場としての家族という場で、それぞれがリラックスして自分の役割を演じていればいいじゃないか、という緩やかな提案として読まれるべきかもしれないですね。

辻村 家族小説では崩壊と再生が描かれがちです。私自身もそういうテーマの小説が好きです。一方で、崩壊しない家族を書いてもいいんじゃないかという気持ちがあります。崩壊したり事件が起こらなくても、ささやかだけれどその家族にとっての営みが、その家族にとっての日常であるはずですよ。波風立たない日常を描くことをやってみたかったです。『オーダーメイド殺人クラブ』(2011・5)も、いま振りかえてみると、日常を描いた小説だったと思います。あれだけの枚数を費やして書いたものが結局日常だったという(笑)。そこが到達点でもあり、爽快な挫折もしたんです。結局自分は日常を書きたい人間なんだということがわかりました。

——『オーダーメイド殺人クラブ』はコップに満たされた水が、表面張力でぎりぎりこぼれずにいる作品ですね。こぼれるかこぼれないかの瀬戸際で物語がせめぎ合っています。

辻村 事件が起きてしまった『ゼロ、ハチ、ゼロ、ナナ。』では水がこぼれてしまったんですけど、それでも日常の中で起こりそうな、日常の価値とか日常の空気を含んだ上でこぼれてしまう時と、そうではなくてシンプルに日常を描く場合が自分にはあることを、最近になってわかり始めたところです。

——辻村さんにとっての次の十年で、日常を出発点にさらにどのような展開がもたらされるのか、とても楽しみです。

辻村 十年後にまた、このチラシのような二十周年新刊リレーフェアを作ってください、

そのチラシを見た自分が驚いたり喜んだりできたらいいなと思います。

※このインタビューは、「物語を探しに」（「小説現代」2014年12月号）に掲載されたインタビューのロングバージョンです。